

## 「くらしのたしかめ」の時間について

立山町立釜ヶ淵小学校

教諭 十松 大顕

### 1 くらしを見つめる・見直す構えをつくる

低学年である自級の「くらしのたしかめ」の時間は、学校や家で心が動いたことを話題として出し合い、互いの見方・考え方・感じ方を認め合い、高め合うことをねらいとしている。特に、入門期の1年生なので、互いの考えを聞き合うことに馴染んだり、友達の考えを理解したりしながら、話の筋をつくり上げていくことを学んでいる。また、「似ていて」「おたずね」「おたすけ」「ちがって」「だって」等の言葉を駆使して、話をつなげていくことを学んでいる。このような経験をくり返しながらか、「聞いてもらえるって、うれしいことだな」「みんなで話し合うって、楽しいことだな」等と心から思えるようになってくる。多くの子供たちに「聞き合い」の意欲化が図られ、聞く構えが見られるようになってくる。

やがて、高学年になると、自然や社会の出来事や友達のくらしにおけるものの見方・考え方・感じ方を共有し、対象に意欲的に働きかけたり、行為の解決のための手立てを探ろうとしたりする構えをもつようになってくる。言い換えると、目当てをもってくらしをつくっていかうとする構えができてくるのである。最終的に、「くらしのたしかめ」の時間が、6年間をかけて、上述のように位置付いてくることで、学級運営や日々の授業の核となって日々のくらしが充実していくと考えられる。

### 2 本質的な学びを創出する

毎週1～2回設定されている「くらしのたしかめ」の時間。子供たちは、この時間を楽しみにしているのだろうか。自分たちで「○○なことについて、聞き合いたいな」、「みんなでこんなことについて、聞き合いたいな」という思いをもって臨むことがあるだろうか（毎回ではないが）。または、「今日は、どんな聞き合いができるのかな」とわくわくしながら、その時間を待ち遠しく思っているのだろうか。それとも、いつも教師や日直の話題提示を待ってから始まっているのか。（「今日は、何について話し合わせればいいのか」と重荷を感じる教師もいるのではないか）

子供は、楽しみながら学ぶ。その楽しみは学びが深まるにつれて相対的に深まり、本当の深い楽しみを味わうに至った時には、本質を追究する学びの力が身に付く。

「くらしのたしかめ」の時間も、子供にとって楽しいものとなれば、意欲的に「聞き合い」の力を鍛え、自ら生きる力の基盤を獲得していく時間になると考えられる。

その姿の表れとして、教師が子供たちに何らかの言葉を投げかけるのではなく、子供たちの方から「ぜひ、今日は聞き合いをしたい」と言ってくるような状況が生まれ、子供による主体的な「くらしのたしかめ」の時間が生まれてくるのではないか。「くらしのたしかめ」の時間を心待ちにし、「学び合い」を楽しもうとする子供たちが、どんどん出てくるのではないか。「くらしのたしかめ」の前段階としての仕掛け（問題を媒介として、子供と対象を結びつける）の有無が、子供の意欲に大きく影響してくる。

さらに、教師がその場における「聞き合い」をどのようにコーディネートしていくか、事実を基に互いの感情を関わらせ、生き方や価値観、意味を顕在化させ、自己内対話に至るよう支援する技術的な力を身に付けていくことによって、より子供も教師も「学び合い」を楽しむ時間を享受できるようになるのではないかと考える。

### 3 「聞き合い」のきっかけを仕掛ける

馬を水辺に連れていくのは簡単だが、水を飲むのは馬の意思しだい。  
犬はいつでも吠えるのではなく、鼻先が濡れてきたときに、ワンと吠える。

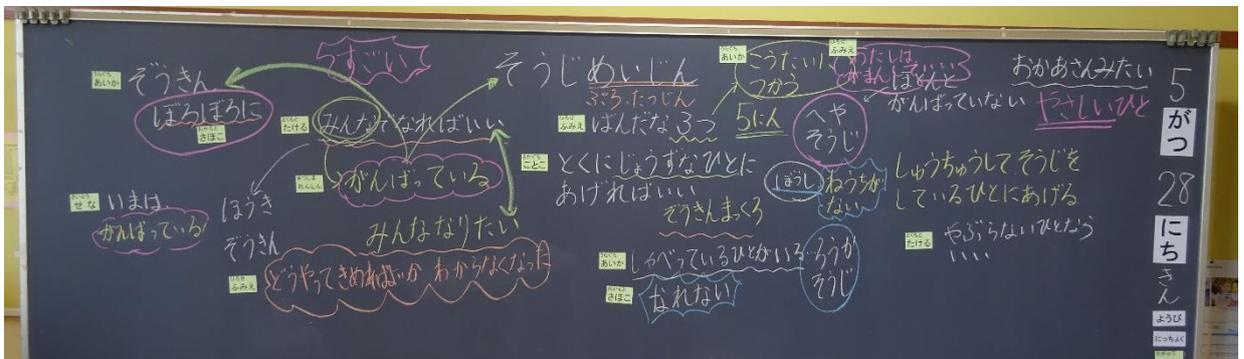
子供たちをどのように、飲みたい状態・濡れた状態（互いの考えや思いを聞き合いたい状態）にするかが、教師の力量。いつも、どこかにおもしろい出来事はないかな、対象はいないかな。そう思っていると、不思議と幸運な出来事に出会ったり、対象の方からこちらの方に表れてきてくれたりする。例えば、アピタのバンダナであったり、駐車場のノコギリクワガタ・農園のカマキリであったり、下弦の月であったりするから、おもしろい。求める者の前に、表れてくるから、世の中は捨てたものではない。さらに、学校行事、継続して取り組む農園活動やボランティア活動、通知表の評価について等、それらを生かそうと、ちょっといたずら心をもって子供たちを刺激すればいい。

- (1) 暮らしのなかで、子供たちが問題意識をもって取り組んでいることは、そんなに多くない。清掃一つを取り上げても、「今日は〇〇をしよう」と清掃している子供はあまりいない。なぜなら、清掃場所も清掃方法も全て決まっているし、振り返りも形骸化していくからだ。互いの評価にさらされることもない。

そこで、5月後半に3枚のバンダナを用意した。「そうじめいじん」と言葉提示をする。条件は、バンダナが3枚。決めるのは、みんなということだけ。子供の人数は、10人。7人は、着けることができない。誰が「そうじめいじん」になって着けるのか。子供たちにとっては、大問題である。がぜん清掃を張り切り出す。教室の白い机の下に入って、きれいに拭くHさん。重い机を二人で持って運ぶAさんやOさん。細かい溝まできれいにするKさん。互いに友達のがんばりを見ながら、自分のがんばりを高めていく。



清掃に対するがんばり度を3色のシールで貼る自己評価、友達がどのように掃除をしているのか見ることでの他者評価を通して、子供たちは「そうじめいじん」になりたい思いを高めたり、その意味を考えたりするようになってきた。「先生、聞き合いをやりたい」という子供たちの声に応じて「暮らしのたしかめ」へ。話合いは、合計4時間。2週間にわたった末、雑巾の裏が黒い順と決め、みんなを選んだ（自己決定の場）。夏休みを迎え、バンダナは一時教師預かりに。

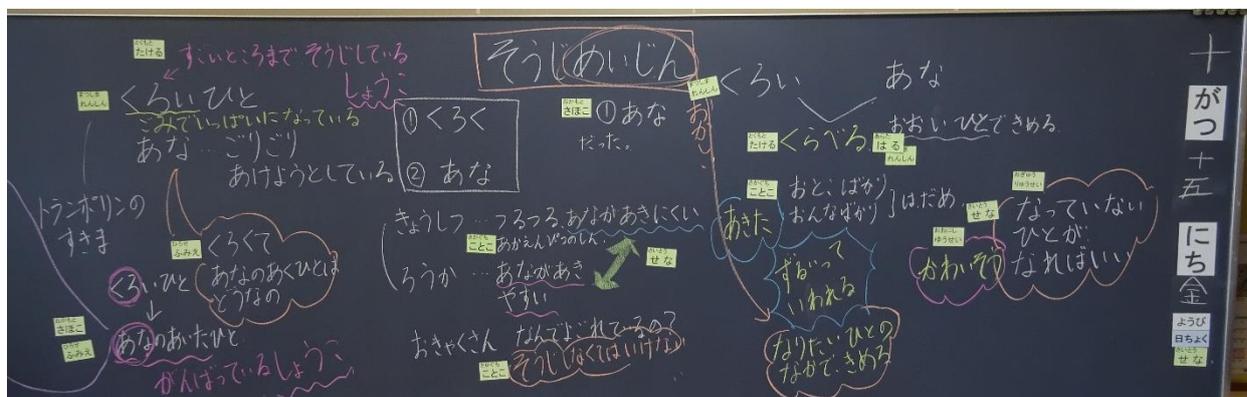


- (2) 2学期が始まると、バンダナのことは忘れてしまったのか。それとも、子供たちの意識は、虫捕りにとってかわられたのか。このとき、担任はのんびりと待つ。

10月に入った。Mさんが「先生、そうじめいじん、せんが」とぼそりと言いだした。「おれは、せんでもいいや」とTさん。そのうちに、休み時間にあちらこちらで「そ

うじめいじん」の話が何度も聞かれるようになってきた。1週間ほど待っていると、Mさんや数人の子供たちが我慢できなくなったという口調で「先生、そうじめいじんの話をしたい。いつしてくれるが」と「聞き合い」の時間を要求してきた。水を飲みたがってきたのだ。「じゃあ、今度のくらしのたしかめの時間にしましょう」と教師は返答した。

「聞き合い」では、①雑巾の裏の色が黒い、②雑巾に穴が開いているほうのどちらにするかという、「そうじめいじん」を決める順序について、MさんとHさんの話から始まった。どちらもなりたくてたまらない。そのうちに、「そうじめいじん」になっていない人がかわいそうだからならせてあげればいいという公平な価値観をもつKさん。それでは、「そうじめいじん」の意味がなくなってしまう。自分になりたくてたまらないが、「そうじめいじん」の本質を明確にもって、自分にその価値がない時はならなくていい、その価値がある人になるべきであると主張するMさん。この発言は、「そうじめいじん」になれるかどうかの判断は、他者に委ねるのではなく、自分の生き方の本質に照らし合わせて決定するという強い思いが感じ取られるMさんの発言だった。その後も、さまざまな価値観が飛び交いながら、あっという間に1時間終了。次回に持ち越されることになった。



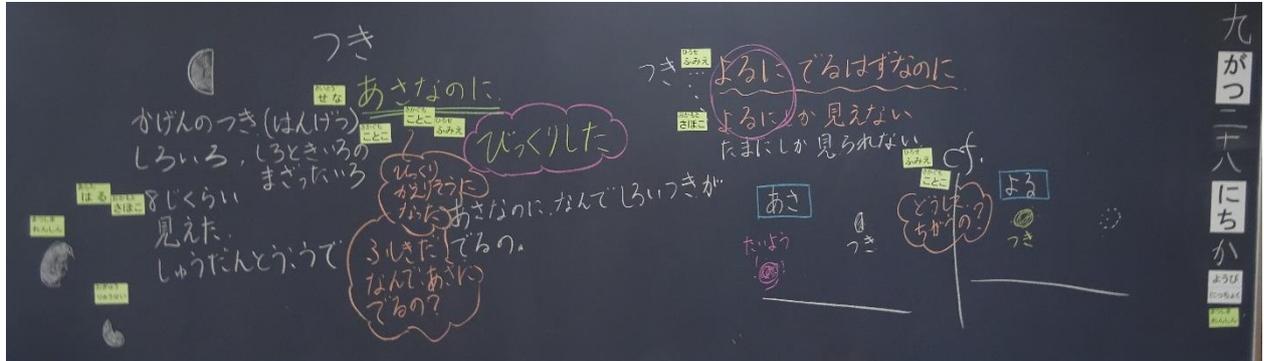
- (3) 動植物とのふれあいは、ときに大きな波紋をもたらししてくれる。あさがおや農園の野菜、昆虫や魚といった生き物は、子供たちが目を輝かす対象となる。子供たちは、これら対象が自分をめぐるものとして捉え、その対象への働きかけ方の方向性を打ち出すことで、自己の内面を反映させ、価値観や生き方を顕在化させてくる。その過程で、自然界に存在する「いのち」、優しい「めぐみ」や厳しい「おきて」を実感し、言葉や媒介を見つけたことを交流するようになる。それらを学級の友達と共有することで、見付ける心が育くまれていく。

6月後半。朝、駐車場から学校の入り口に向かうところに、きれいな茶色のものが。何と、ノコギリクワガタの雄であった。これを教室に持っていけば何かが起こる。楽しい予感がした。子供たちには気付かれないように、そっと手に付けて教室に。ところが、見逃してはくれなかった。すかさずTさんが「先生、手に何か持っている」と言い始めた。あっという間に、教室の注目の的になったノコギリクワガタ。土日を控えた金曜日の「くらしのたしかめ」の時間。

子供たちが問題としたのは、このノコギリクワガタを逃がすのか、それとも飼うのか。キャンプに行った経験があるRさんは、「山の木に樹液があるので、逃がせばよい」と言ってくる。Mさんも、自然に返すのがよいと言った。それに対し、「ゼリーがあれば元気になるよ」とKさん。保育園でクワガタを飼っていて、楽しかったので、また飼いたい」とOさん。「土もゼリーも、家にあるので持ってくるよ」とHさん。そこで、



最後に、「夜は、月しか出ないのに、朝は、太陽も月も出ている。朝だけ2つとも出ているのは、おかしい」とKさん。条件は同じであることが、自然現象の前提になるという考えに合わないからなのだろうか。または、日常生活の中で、Kさんが諸事に対して公平・公正にあらうとする、ものの見方・考え方に整合しないと思うからだろうか。自分の心に矛盾をかかえ、納得できないと思っていた。そして、その日の聞き合いを終えた。



9月29日（水）

朝の会の後、下弦の月を見たいと子供たちが言うので、グラウンドに見に行った。8時半近くなのに、白い月が空の中央付近に出ている。「あった。あった」と喜びながら、白い月を眺めていた。そのうちに、雲梯につかまり、月に近付こうとするMさん。砂山にのぼって、月を見ようとMさん、Tさん、Rさん。月から離れるように、校舎から離れた場所から月を見ようとするTさんやSさん。場所を変えることで、月の見え方が変わらぬか自分の目で確かめていた。



教室に戻ると、「白い月でも、ウサギがもちをついていた」と言うKさんやHさんに対し、「そんなんは、見えなかった」と主張する男子たち。今度は、月の中のウサギを見るのか、子供たちの知的好奇心は、どんどん膨らんでいった。

#### 4 今後の見直しをもつ

ここまでは、「くらしのたしかめ」の時間のほんの一部だが、抽出児を選んで、記録を時系列に並べていくことで、その個特有のものの見方・考え方・感じ方や生き方、価値観等が見えてくる。子供は、いつも意識的に行動したり、発言したりするわけではないが、無意識の行為や発言についても解釈を入れながら、記録を累積し、つないでいくことで、より子供理解の力を付けていきたいと思う。

また、1年生後半になることから、継続的な活動を通して、互いの活動の歴史を交流し、抽出児を子供理解の灯台として、見つめていくことにも挑戦したいと思う。

さらに、読書・百人一首に仕掛けをしながら、子供たちに出会わせていきたいと考えている。